

【「困った子」は「困っている子」】

生活教育の実践は、子どもを深く豊かにとらえることとともにすすんでいます。机に座らず立ち回る子、リストカットをくりかえす子、内申点ばかり気にする子などなど、「困った子だな」と「問題児」扱いされる子どもが増えてきた中で、どんな子どもか、どういう発達の状態かがわからないと、指導する手がかりが持てず、かかわるのがいやになつたり怖くなつたりします。そういうときに、その子どものほうこそがどうすればいいかわからないで「困っている」のではないかと、考えてみる提案です。子どもの内側の気持ちに思いを寄せることで、子どもとのかかわりが持てるのです。理解することがはじまつてその子が愛おしくなつてきます。

日生連では、障害のある子どもとの実践から、子ども観の深化がすすみました。参考文献①の竹沢実践をぜひご覧ください。子どもの見方を変えたり深めたりするには、子どもが成長発達した事実をていねいに

生活教育 キーワード

さえることが大事です。その事実を見抜くやり方も書いてあります。「困っている子」として対応すると他の子どもが「ひいきだ」と見ることもあって、困っている子への対応はみんなもしてほしいことのようにです。そういう事実から「困った子はみんなの代表」との見方も出てきました。

さらには「子どもを発達現実態ととらえる」ことも提唱しています。「○○できない、○○がわからない」と欠如態でみるのではなく、また可能態として漠然と可能性を考えるにとどまるのではなく、「子どもの中に何があるのか」と見ます。これはアリストテレスやヘーゲル、マルクスのものの見方を子ども観に応用しています。（研究部・加藤聡一）

文献① 竹沢清「子どもが見えてくる実践の記録「困った子」ではなく、「困っている子」として」全障研出版部、2005年。

文献② 神田英雄「はじめての子育て 育ちのきほん 0歳から6歳」ひとなる書房、2008年。